



子どもの心の健康講座 ⑭

自閉スペクトラム症の子どもの実際

「発達障害」という言葉は、近年広く聞かれるようにはなりませんでした。しかしその詳しい中身はまだ充分に知られておらず、誤解も多いのです。そこで、今回は各年代で見られる自閉スペクトラム症の主な特徴と専門機関へのつながり方を少しお話ししましょう。

発達障害の特性は、生まれつきですから、乳幼児期からいろいろな症状がみられます。しかし実際には、

思春期に入って初めて専門機関にかかったり、大人になるまで気づかずにさまざまな困りごとが起きて医療機関を受診し、初めて気づくことも珍しくありません。

(1) 乳児期～幼児期

「視線を合わさない」「人見知りしない」「相手と一緒に同じ対象に注目しようとするのではない（共同注視がない）」という様子や、「言葉がなかなか出ない」「話しても言葉数が増えない」「長い文章にならない、助詞や代名詞をうまく使えない」「話しはするものの、一方的で会話のやりとりが少ない」など言葉の問題は気づきやすい特徴

です。感覚の敏感さが表れるのも特徴的です。「年相応に他人の表情や気持ちを読み取れない」「集団での遊びの意味を理解できない」「他の子と遊ばず、一人で好きなことだけに没頭する」「道順や予定が変わるととても嫌がり、泣き騒ぐなどパニックになる」などのほか、こだわりが強い、偏食が強い、特定の音をとっても嫌がるなどという様子も。

通常に比べて育児が大変な場合も多く、親や他の家族が早い段階で何となく気づくこともあります。1歳半、3歳時の乳幼児健診、保育士、幼稚園の先生が集団の中の様子を見ていて気づくこともあります。不適切な育児、児童虐待の相談を受けてその子の特性が明

らかなる場合もあります。

(2) 小学生の時期

乳・幼児期の特徴に加えて、「学校で集団のルールが分からず自分勝手に振る舞う」「耳で聞いただけでは先生の指示が分からず忘れてしまう」と集団行動の問題が表れがちです。

「相手の気持ちを汲み取れずトラブルになる」「言葉の深い意味を理解できない」「親しい友達ができず孤立する」という対人関係の問題、「いじめの対象になる」「相手が嫌がっているのにしつこく嫌なことを言い続けてしまう」、光、音、人間関係のつらさ、ストレスによる体の不調などで登校が難しくなる症状が表れるようになり、その時に親や学校の先生が気づい

て専門医の受診を考えるようになることも多いようです。

(3) 中学、高校生の時期

異性への関心が強い年代になって「相手につきまとう」「いきなり（皆の前で）告白する」「相手のものを盗む」など不適切な行動をしがちです。

「羞恥心、プライバシー」という感情を理解しづらい」「細やかな人の心の機微を理解できない」「クラブ活動などで上下関係が分からずトラブルになる」「自分が人と違うことに気づき苦しむ」「睡眠がうまくとれず登校が難しい」「犯罪、金銭トラブルに巻き込まれる」ということも。

高校生になると、「好きな科目の授業は受けるが、苦手な科目を避けるので単位を取れない」「能力に見合う現実的な進学計画を立てられない」などが目立ちます。

相談から診断、そしてサポートへ

幼少期は、子育て支援センター、障害児相談支援事業所（おひさま教室、こころん相談室）、保育園の先

生、保健所、役場保健福祉センター、児童相談支援事業所、保育園や幼稚園の巡回相談、児童相談所、小児科が相談窓口です。

小学生以降は、学校担任、学校の特別支援教育コーディネーター、発達障害者支援センター、児童精神科などでも相談できます。社会の中で暮らすことが

難しくなってしまう時、『しょうがい』と名前を付けることで、今起きている問題がどういふことなのか理解でき、本人や周囲が具体的な対応策を考え、少しでも生きやすくなるのが出来るようになるのです。

同じようなつらさを抱える人を参考に出来、助けを求めやすくなります。助けを求められた人は、専門的な知識を持って出来る限り認知や行動の特性の不利をサポートし、「合理的な配慮」を工夫することが大切です。

児童精神科医

北 畑 歩